

「あなたが考える福祉のある風景とは何ですか？」この質問を聞いた今の私は、幸せなこと、楽しいこと、嬉しいことが日々感じられる生活があることだと答えます。しかし、2年前の私ならば、老人ホームや障がい者施設があることと答えたでしょう。つまりこの数年で私の考え方は大きく変わったのです。何がこんなにも私の考え方を変えたのでしょうか。

高校1年の春、何気なく楽しそうだなと思って参加した障がい者スポーツフェスティバル。会場につくと手話や車椅子、盲導犬など、普段あまり目にする機会がないものが溢れていました。自分の中で障がい者のイメージみたいなのが勝手にあって、かわいそうだなと思ったこともありました。ですから、障がいを持った方にどう接していいのかわからなくてとても不安でした。もちろんボランティアに参加したわけですから、助けてあげなきゃと勝手に使命感を持っていました。実際その場に着くと人見知りもあり、どうしていいのかわからず一人であたふたしていたのです。その時、支援学校の子が話しかけてくれました。とてもフレンドリーで話しやすく、おかげでその場にすぐ和めたとし、不安も消えていました。みんなとっても楽しそうで、何もかもに全力で取り組んでいました。そのような姿を見て、私もつられて普段だったら絶対に本気でやらないパン食い競争も、まるで獲物を狙う猛獣かのように取りに行きました。しかも何回も支援学校の子と一緒に。その時に学びました。支援する側、される側ではなくて一人の人間としてこの場を本気で楽しむことができることが大切なのだ。

私は、高校生になってからボランティアや授業で福祉と関わる機会が多くありました。だからこそ、身近に福祉が溢れていることに気づくことができました。それは、他でもない障がいを持つ方々やお年寄りの方々に学んだのです。ボランティアは、「助けにいく活動」と思いがちですが、私は学ばせていただく場なのだと思います。世の中には、福祉の意味を昔の自分のように勘違いしている人が多くいます。その人達が自分の身の回りに溢れている福祉のある風景に気づいて、感謝の気持ちを持って生活していけるようになればいいなと思います。